

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.62 死と対峙する ということ

「これはあまりに惨い現実とちゃうん。人間なんて弱い存在や。完璧な人間なんておまへんわ。やのにこの仕打ちは、仕打ちはちょっとひどいんとちゃいますのん。や、山部はん、どない思わはります？」

御手洗が和尚と古川の間のあまりに重くて身を切るような辛辣なやり取りに思わず口を挟んだ。

「……………」

喫煙歴をもつ山部は、脳梗塞による高次機能障害を残した自分の過去と今後なるであろう病気の恐怖が重なり絞り出す言葉もなく、こちらも辛辣な面持ちで答えに窮している。

健康道場究極の無想空間では重い空気の中、ひたすら時間が刻まれていく。「無」を求め、何も話さない、話せない重圧に耐えかねて、姫が山部の上着の裾を引く。

「この重さ何とかありませんか。」

警策が闇の中から姫の肩に刺さる。

「ち～っ！ ……済みません。」

夕焼けがやけにまぶしく目に映る堂の外。無想空間での修業が終わった三人が談笑している。

「今日の無想空間はきつかったわ。」御手洗が口を切る。

「でしょ！ 私なんか重たい経験がないから、古川さんの話では、右往左往してたけど、お二人さんは感じ入るものがあったの？」

「ワイは髪の毛3本ほど残して棺桶に浸とったわ。」

一呼吸おいて「私は脳を持って行かれそうになった。」山部が続ける。

「やはり、一度でも死を現実のものとして体験した者にとっては、死の恐怖と闘っている人を見ると他人事ではなくなるね。」

「そういうこっちゃ。死の恐怖はとてつもなく広くて巨大な暗雲の中に置き去りにされるちゅうか、だからこそ、今の生を後悔したくない。いざ死ぬ時には朗らかな顔をして死にたいしな。」

「そんなもんかな？」

「そんなもんやって」

「ふ～ん。今度、古川さんにじっくり聞いてみようかな？」

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一